

【学位論文審査の要旨】

本研究は、リハビリテーション専門職がかかわる対象者のニーズに配慮した福祉用具開発のプロセスの最適モデルを作業療法士の視点から構築、検証した研究である。

主論文においては、先行研究、機器開発に関する理論および事例検討に基づき、臨床でもニーズの高い起居移動動作支援機器の開発を題材とし、Methodology for User and User's Life Centered Clinical Evaluation of Assistive Technology (ULCEAT) というプロセスを構築、提唱した。今回対象とした起居移動動作支援機器とは、ロボット技術を活用した電動ベッド兼、電動車いすの両方の機能を有する機器である。副論文においては、ULCEAT において想定された障がいをもつ使用者を対象とした実地検証を行い、ULCEAT の信頼性を示した。

ULCEAT は、中村オリジナルのアイデアであり、エンジニアではなくリハビリテーション専門職により対象者の視点、ニーズにコミットして立案されている点が高く評価できる。本研究成果は、方法論に焦点化したものであるが、現在までは、エンジニア主導でものづくりが推進され、ユーザーや中間ユーザーにどのように臨床に応用できるかを適宜問うプロセスによるものが多くあった。しかし実際のユーザーの障がい像やニーズを反映できなかったものも混在していた。中村は、この開発過程を整理し、リハビリテーション専門職が生活支援機器分野に具体的に貢献できることを提案し、プロセスを次のように明確化した。

プロトタイプの商品評価を、①第一に中間ユーザーであるリハビリテーション専門職が実施し、現時点で明らかである問題点や想定されるユーザー像を明確化し、ものづくり側に情報を提供し問題解決を促し、②抽出された障がいをもつ対象者の生活でその装置を活用することが予想される生活場面での動作を実施してもらい、ユーザーの意見を加味するという二段階によるモデルを提案した。また、副論文において、ULCEAT という提唱モデルが実例でも成立することを示したという、信頼性を検討する研究デザインも高く評価できる。一連の研究成果は、もちろん、エンジニアの自由なアイデアやコンセプトを否定するものではなく、よりユーザーのニーズを汲みとり、生活を支援する機器を開発する上で重要な「ユーザーセンタード」の視点を加味することの利点を明示している。また、リハビリテーション専門職に対しては製品開発のプロセスで専門職が果たすべき役割を明確化した点に意義がある。ULCEAT は、生活支援機器を開発する方法論として、作業療法分野だけではなく分野を超えて大きく貢献できることが予想され、学術的、経済的、社会的に非常に意義があると考えられる。

一方、研究上の課題としては、対象事例がやや少なかったことがあげられるが、明確な研究計画に基づいた丁寧な量的、質的分析を経た上で導出した結論であること、生活支援機器分野において作業療法士として初めてオリジナルの開発プロセスに貢献する方法論を提唱したという先駆性を考慮すると十分に意義深いものであり、今後の発展性も期待できる。

博士学位論文審査の要旨

審査会においては、前半の5分間で研究成果のプレゼンテーションを実施し、その後の15分間、質疑に対し真摯かつ論理的に応答した。質疑の内容は、研究の内容に関すること、研究倫理に関する確認等であった。今後の研究活動に対する熱意も確認された。

以上より、本論文は博士論文に相応しく、著者が博士(作業療法学)の学位に相当するものとする。